

研究主題

「授業の探究」 ～価値あるものを自分事として学ぶ授業の創造～

1 研究主題について

(1) 研修主題への思い

私たちは、子どもが、新しい時代に必要となる資質・能力を「価値あるもの」としてきた。学習指導要領では、「何を知っているか」(コンテンツ、知識・内容)から「何ができるか」(コンピテンシー、資質・能力)、より詳しく言えば「どのような問題解決を現に成し遂げるか」へと転換している。また「自分事として学ぶ」とは、子どもが授業の中で身に付けた見方・考え方を他の授業やそれ以外の場面で働かせたとき、その見方・考え方のよさを実感する姿としている。私たちが目指すべき授業が学習指導要領の考え方に通じる普遍的なものであると言える。

令和3年度の10年次の研修では、一人一台端末を使用できる学習環境が整ったことにより、ICT機器を効果的に活用しながら「価値あるものを自分事として学ぶ」という資質・能力を育てる授業の創造に取り組んできた。ICT機器を取り入れた授業の探究では、8年次までに積み上げてきた成果や課題が同様に挙げられた。これまでの研修をICT機器の効果的な活用を取り入れた研修としてもう一度積み上げていきたいと考えた。

1年次の重点であった「単元全体の学習の流れ」については、指導案を今年度から変更して単元構想を加え、ICTの活用場面を単元の中で計画的活用できるようにし、意識していきたい。3、4、5年次の重点であった「学びの深まり」と「可視化、共有化、焦点化」の視点については、令和3年度も課題として再認識した。今年度は、ICT機器の活用が子どもの「学びの深まり」に効果的であるのか、「可視化・共有化・焦点化」の視点から子どもの姿で語る研修を行っていきたい。

2 研究課題

子どもの対話から学びを深める ～単元を見通したICTの活用～

(1) 研究課題のとらえ

本校の授業を語る際に対話は欠かせないものである。どの教室においても子ども同士の対話する姿が見られ、子ども同士の対話の質の向上も見られる。しかし、ただ対話をしていれば勝手に学びが深まっていくものではない。

本校が課題としているのは、その対話からどう学びを深めることができるかである。「可視化」「共有化」「焦点化」を視点として、「対話」に対してどのような教師の出(働きかけ)が子どもの学びを深めていくことができるのか研修を進めてきた。

昨年度から、1人1台端末を活用して日常的に授業を行うことができるようになった。1人1台端末は、その活用による子どもの深い学びの実現に大きな期待が寄せられている。私たち教師にも、その積極的活用と活用能力の向上が求められる。

また、静岡県教育委員会から GIGA スクール構想（により 1 人 1 台端末）下における『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善」調査研究事業の指定を、よつば学府の 2 小 1 中学校で受けることになった。ICT 機器の効果的な活用に積極的に取り組み、その研究成果を県下の小中学校に発信していく責務を担うこととなった。

そこで、本年度の研究課題を「子どもの対話から学びを深める～単元を見通した ICT の活用～」とした。昨年度の課題として ICT の活用場面の精選が挙げられ、学びを深めるためのタブレットの活用場面について研修を進めたいという声が多くあった。タブレットの機能を利用することで子どもたちの考えを単純に可視化、共有化することはできた。しかし、それだけでは対話につなげることが難しく、形だけの可視化、共有化になっていることが課題となった。とくに、焦点化については対話を通して学びを深めていくうえで大切な視点であるが、ICT の活用ばかりにとられてしまいタブレットとの対話になりがちになってしまった。今年度は、対話を通して学びを深め、焦点化されていく授業づくりを行っていききたい。

そのために「可視化・共有化・焦点化」をより具体的に教師の出として単元を通して見通しをもった計画を行っていききたい。

参考※子どもの学びが深まっている姿とは
中央教育審議会（答申）では習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、
・知識を相互に関連付けてより深く理解する。
・情報を精査して考えを形成する
・問題を見いだして解決策を考える。
・思いや考えを基に創造することに向かうこと
を「深い学び」としている。いったん習得した知識やスキルを活用しながら他者と共に問題解決を行うことを通して、自分のものにしていく姿である。

（2）研究内容

①学び手の視点で授業をつくる→単元を見通した ICT 活用場面の精選

- ・育成を目指す資質・能力を明確にして授業を構想する。
- ・単元構想に「可視化・共有化・焦点化」、ICT の活用場面を明記し、深い学びを実現するための視点を明確にする。→指導案に反映させる。
- ・子どもの思考過程を生かして授業を展開する。
- ・資質・能力の伸長について子どもと共有する。

どのように ICT を活用すれば自分事として学ぶ子どもになるのか？

②具体的な子どもの姿で学びの深まりを捉える。

その教科でその単元または時間に子どもの学びが深まっている姿とはどのような姿なのかを授業者が捉える必要がある。それは子どもの表面的な表れではなく、子どもの思考の深まりである。子どもたちは教材の魅力があれば、他者や自己との対話を通して思考をくり返すはずである。その思考をくり返した結果、子どもにどのような変容が生まれるのかその姿を授業者自身が捉えた上で授業に臨みたい。

教材を研究する中でその教科で子どもたちはどのような「見方・考え方」を身に付けてきたのかを把握し、その単元やその時間における子どもに身に付けさせたい「見方・考え方」とは何か

を研究していく。まさにその教科の本質を捉えることが求められる。そのために単元としての見方を高める必要もあるだろう。その1時間だけでなく、単元を通した教材研究を充実させていきたい。

③指標を設定し、成果を検証する。

今年度は、評価指標として学校評価「コンピュータなどを使って、自分の考えをまとめたりわかりやすく相手に伝えたりすることができる。」を活用する。静岡県の子どもの課題として挙げられる「根拠や理由を明確に示して自分の考えを述べる」は本校も課題となっている。昨年度の成果としてタブレット端末の導入により、子どもたち同士の共有が容易になったことやこれまで意見をもてなかった子たちも表現できるようになった事実があった。子どもたちの自分の考えを表現することへの抵抗を減らしていき、より対話を大切にした授業づくりを目指していきたい。単元を見通した計画を行う中でこれらの場面を取り入れ、考えを伝える場面、伝えたいくなるような仕掛けを行っていく。

対話 ← 話したくなる授業 ← 自分の考えが持てる 対話につなげるためには、まずは考えをもち、それをみんなに伝えたいという思い（意欲）が必要。
--

検証方法は、ステージ評価を活用し、子どもたちの「伝えることができる」意識を調査していく。授業研究などでは、伝える、対話する授業の構想をしていきたい。

(3) 研究方法、具体化する手立て

①子どもがICTを主体的に使い、深い学びにつながる活用を行う。

- ・ICT活用によって課題や問いの「可視化・共有化・焦点化」
- ・仲間と一緒に考えたいくなるような動機付け
- ・比較したり統合したりすることが可能な様々な資料をICTによって提供
- ・子どもが学習の過程を見通したり、振り返ったりできるようなICT環境を提供
- ・授業開始時と終了時の学びの変容や、途中の過程、疑問などが記録されていて、ICTが次の学びや授業展開につながる評価ツールとして活用
- ・新たに生じた疑問など、子どもの主体的な学びの広がりに対応できる環境づくり

②ICTの特性を活用し、子どもの「主体的・対話的で深い学び」を支援する。

- ・資料・情報を提示しやすい
- ・情報を収集しやすい
- ・情報をまとめやすい
- ・学習の過程や成果を保存しやすい
- ・即時性がある
- ・多様な教材を準備しやすい

これらの特性を活用し、学習目標を達成するための活用を行う。

③単元を見通してICTの活用場面を精選し、単元構想に反映させる。

- ・学習指導要領や子どもの実態に基づいて育成を目指す資質・能力を明確にし、子どもの思考過

程を具体的に想像しながら単元や題材を構想する。

- ・協働や対話などの他者と関わることの必然性を子どもが感じるように、その目的や方法を子どもと共有する。
- ・子ども自らが学びを振り返り、学びの積み重ねや成長を実感できるように子どもの学びを評価し、共有する。

研究構想図

